

子どもの心身の発達に家畜が及ぼす影響についての考察

— 内モンゴル自治区¹⁾のマラチン (malcin)²⁾の事例研究 —

The Influence of domestic animals on the physical and mental development of children in the case of Inner Mongolia

宝 力 嘎*

Abstract

This paper considers the influence of domestic animals on the physical and mental development of children in Inner Mongolia, based on my research which was carried out on 411 children of 8 elementary schools in September 2008. According to the results of the survey, care of domestic animals promotes children in the pasturing culture (where people are called “malcin” in Mongol) not only to build up their bodies, but also to develop their sense of responsibility, concentration and judgment. The children also tend to respect life, enhance their sociality, and naturally deepen their moral view, for example, seeing bullying as wrong.

キーワード: 内モンゴル、マラチン、家畜、子ども、命の教育

はじめに

日本の小学校では様々な動物が飼育されている。学校における動物飼育活動は、子どもたちに「係活動」を体験させる一方で動物飼育を「命の教育」に活かそうとするねらいがある。「動物の死を経験して、仲間に死ねと言えなくなった」など動物を飼育することにより子どもの行動が変わったという報告もあり、確かに、動物との触れ合いは、子どもの心を豊かにするばかりではなく、子どもが動物の生と死を体験することによって命の尊さを実感することができるものである。

しかし、内モンゴル放牧文化における子どもと動物（家畜）の関わりからみると、日本の小学校における飼育活動は人工的な環境での動物との接触であ

り、ややもすると、動物がペットとしてあつかわれるために、動物から子どもへの影響は限定的であると言わざるを得ない。

本稿では、内モンゴル自治区（以下「内モンゴル」と略する）の放牧社会における家畜³⁾とマラチンの関わりをみながら、家畜が子どもの心身の発達にどのような影響を与えているのか、について筆者が行った現地調査に基づいて考察する。

1 調査の概要

(1) 目的と方法

近年、内モンゴルにおいては、市場経済の導入、地下資源の開発、砂漠化などの影響で、放牧によって生計を立てることが苦しくなり、放牧生活を放棄せざるを得なくなったマラチンが急増している。こ

* Bulag 大学院博士課程後期課程 3 年

〈審査論文〉2009.10.1 受稿 2009.12.7 受理

1) 中国の北方に位置する自治区である。面積1,183,000km²、総人口23,840,000人（2004年）。多くの日本人は「モンゴル人」＝「モンゴル国の人」というイメージがあるが、実は「モンゴル人」と呼ばれている人々の移住地域はいくつかに分断されている。それらは、独立国である「モンゴル国」、ロシア連邦内の「ブリヤート共和国」と「カルムイク共和国」、中国領の「内モンゴル自治区」と「新疆ウイグル自治区」である。このほかにも、中国領の青海省、雲南省などにもモンゴル人が分散集中的に居住している。内モンゴル自治区におけるモンゴル人の人口は500万人と言われており、上記のいくつかの地域の中で、モンゴル人が最も多く暮らしている地域である。

2) 季節的に、周期的に家畜と共に移動する人々のことを「遊牧民」と呼ぶが、四季折々に移動することなく、殆ど定住しながら、大自然の牧草で家畜を飼育する人々のことを「マラチン」と呼ぶ。「マラチン」という言葉の語幹である「マラ」はモンゴル人が昔から飼育してきた五畜（馬、牛、羊、山羊、駱駝）をさす。内モンゴルにおいては、マラチン＝モンゴル人というイメージが定着している。また、家畜をただ生産物として扱う人々のことはマラチンと呼ばない（図1）。

3) モンゴル文化においては、「家畜」とは通常、牛・馬・羊・山羊・駱駝を意味する。

のような時代の荒波の中で、内モンゴルのマラチンの家庭教育がどのように変わろうとしているのか、その実態を把握することが調査全体の目的であったが、本稿では、2008年に内モンゴルシリリング盟⁴⁾で行った調査データに基づいて、家畜が子どもの心身の発達にどのような影響を与えているのか、について明らかにする。

(2) 質問紙項目の設定

筆者が調査項目を考えて日本語で作成し、様々な方にアドバイスを受け、修正した後、筆者がモンゴル語に訳した。翻訳の際、内モンゴル錫林浩特（シリント）市蒙古族小学校の吉・呼格吉乐图氏のアドバイスをもらった。そして、2008年5月に錫林浩特市蒙古族小学の子ども78名（4年生42名、5年生37名）、教師10人、保護者27人を対象に予備調査を行い、予備調査の結果を踏まえて調査項目に修正を加えた。調査紙は「子ども用」、「教師用」、「保護者用」の3種類であるが、本稿では「子ども用」と「保護者用」の調査データを使用する。

(3) 調査手続

筆者がシリリング盟のモンゴル語で授業を行っている各小学校を巡回して調査を行った。子ども対象の調査の場合、筆者が調査対象の学年の教室に入り、調査の意義を説明した上で、調査項目を一問ずつ読み上げ、記入の仕方を説明しながら回答してもらった。回答時間は50分である。保護者対象の調査の場合、1学年から1クラスを選び、選んだクラスから5人程度の子どものを通して調査用紙を保護者に

配布し、保護者に回答してもらい、翌日に担任を通して回収した。保護者に調査用紙を配る際、読み書きができることを条件とした。調査は全て無記名で行った。

(4) 調査対象等

シリリング盟におけるマラチンの人口が他の地域に比べて比較的多いことから、当地域を調査対象地域として選んだのである。調査対象校、調査年月日、調査対象者数、回収率などについては表1に示したとおりである。

2 放牧文化における家畜と人間の関わり

家畜の概念について「家畜とは人間の生活に役立つように品種改良され、飼養・繁殖管理される動物⁵⁾などと説明されることが多い。しかし、マラチンにとって、家畜の飼育は、ただ乳、肉、毛、皮を利用し、家畜を乗り物や労働力として使うためではない。勿論、マラチンは家畜を屠殺したり売却したりするが、これはマラチンの日常生活の中での主要な行為ではないのである。

保護者対象の調査において、「家畜は人間の生活（乗り物、食料など）に役立つ以外、人間の内面世界にどんな影響を与えていると思いますか」と質問したところ、次のように267人（全回答者283人）から回答があった。

■人々の心を癒す役割を果たしている 112人
(42%)

表1 調査対象校、調査日程、対象者数、回収率

調査対象校	調査日程 2008年9月	全校 生数	子ども		保護者	
			対象学年	回答者数	対象者	回答者数
正镶白旗明安图小学	12日～15日	791人	5年生	67人	全学年保護者	29人
正蓝旗桑根达来蒙古族小学	15日～16日	360人	5年生	56人	全学年保護者	23人
锡林浩特市蒙古族小学	17日～18日	836人	5年生	83人	全学年保護者	48人
阿巴嘎旗蒙古实验小学	18日～19日	981人	5年生	63人	全学年保護者	56人
西乌珠穆沁旗第一蒙古族小学	19日～22日	831人	5年生	48人	全学年保護者	55人
东乌珠穆沁旗蒙古族实验小学	22日～23日	1070人	5年生	44人	全学年保護者	42人
苏尼特左旗附属蒙古族小学	25日～26日	900人	5年生	35人	全学年保護者	10人
苏尼特左旗第二小学	25日～26日	126人	5年生	15人	全学年保護者	20人
合計				411人		283人
回収率				100%		92%

4) 「盟」は内モンゴル自治区の行政単位である。シリリング盟は内モンゴル自治区の中部に位置し、総面積が20.3平方km、総人口が101.6万人（2008年末）の中でモンゴル族が29.78万人（30.5%）を占めている（シリリング盟政府の公式サイト http://www.xlgl.gov.cn/zwgk/xmgk/rkgk/200706/t20070607_15511.html）。

5) 『日本語大辞典』、第二版、講談社、1989年。

- 人々に命の尊さを教えている 53人 (20%)
- 人間の命を助けることがある 52人 (19%)
- 時には人に勇気を与える 47人 (18%)
- その他 3人 (1%)

この回答からみると、内モンゴルの放牧社会においては、家畜は単なる財産や生計の手段だけではなく、人々の精神世界を支える存在でもあることが分かる。

ここでは、マラチンと家畜がどのような関係にあるのかをみてみたい。マラチンは家畜を大きく「経済関係家畜 (A タイプ)」「信頼関係家畜 (B タイプ)」「経済関係も信頼関係もなく、どちらにも属さない家畜 (AB タイプ)」の3つのタイプ (図1) に分けて認識している。つまり、マラチンにとって、家畜 = 「A タイプ」 + 「B タイプ」 + 「AB タイプ」である。

「A タイプ」の家畜とは、乳、肉、毛や労働力などを人々が利用するために飼育している経済関係家畜である。

「B タイプ」の家畜とは<主人の命を助けたことがあるなどの恩のある家畜>、<競馬で優勝し、主人を有名にしたなど群れの象徴となる優れた家畜>、<主人と戯れ、主人の心を癒してくれる愛玩家畜>、<体力があり、乗り心地や性格がよく、乗り物として使われている家畜>、<可愛い仕草で人の心を癒す子家畜>などが含まれており、これらの家畜は主人の精神世界を支える役割を果たしている。日常生活の中で「B タイプ」の家畜を労働力として

使ったり毛や乳を生産物に加えたりすることもあるが、これは「B タイプ」の家畜を飼育する主な目的ではない。

「AB タイプ」の家畜とは、「A タイプ」の家畜のような経済的な価値、「B タイプ」の家畜のような主人との信頼関係がまだ発生していない家畜のことである。この「AB タイプ」の家畜に経済価値が出れば「A タイプ」の経済関係家畜に属され、主人との間に信頼関係が生じれば「B タイプ」の信頼関係家畜に属されるが、その殆どが「A タイプ」の経済関係家畜になる。

「B タイプ」の家畜に属する<子家畜>が成長するにつれ、可愛さがなくなると「AB タイプ」の家畜に属されるが、さらに経済価値が出ると「A タイプ」の経済関係家畜に属される。しかし、その一部が<愛玩家畜>、<恩のある家畜>、<群れの象徴となる家畜>、<乗り物用の家畜>として「B タイプ」の信頼関係家畜に戻ることがある。<子家畜>以外の「B タイプ」の家畜が「AB タイプ」や「A タイプ」に移動することはない。

なお、「A タイプ」の家畜と大人は経済関係で結ばれ、「B タイプ」の家畜と大人は信頼関係で結ばれているが、子どもの場合、これらの3種類の家畜いずれとも信頼関係で結ばれることが多い。また、上記の3種類の家畜の数は「A タイプ」 > 「AB タイプ」 > 「B タイプ」のようになる。

これらの家畜、特に「B タイプ」の家畜は文化や宗教とも深く関わっている。換言すれば、家畜なくして放牧文化は成り立たないのである。放牧生活の中

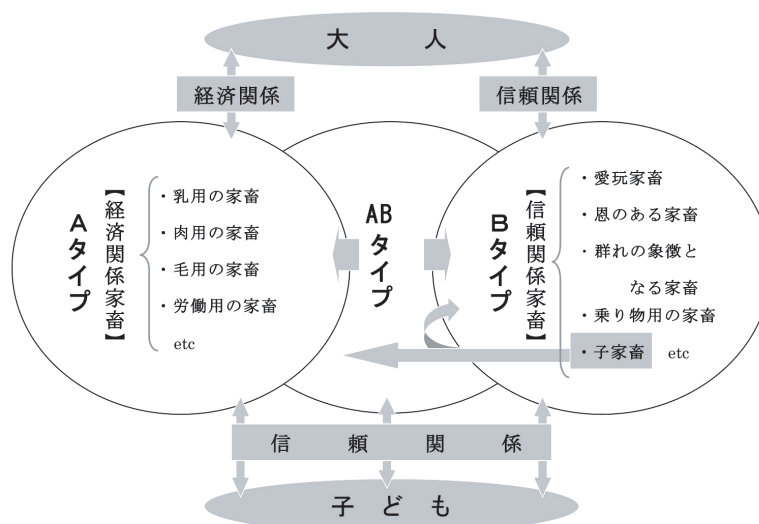


図1 家畜の分類&家畜と大人・子どもの関係図

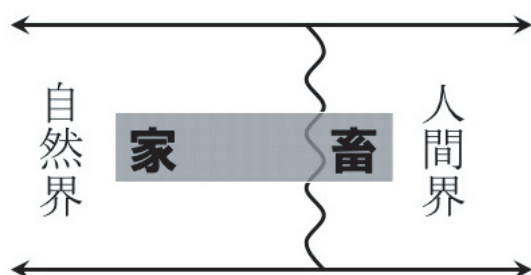


図2 自然界と人間界における家畜の位置

では、家畜に関する歌や詩が多く作られるなど、家畜が放牧文化をより豊かにしている。また、人々が神に祈りを捧げる手段として家畜を使うこともある。特定の家畜が神として崇められることもある。

動物と人間の関係について論じる際、多くの人がコンパニオン・アニマルを想像しがちだが、コンパニオン・アニマルとは、生活の伴侶として人間とより密接な関係を持っているペットを指すのが一般的である。図1で言えば、「Bタイプ」の家畜の中にある「愛玩家畜」がコンパニオン・アニマルに当たる。

マラチンは通常五畜（牛、馬、駱駝、羊、山羊）と呼ばれる家畜を放牧している。五畜の中の牛、馬や駱駝（特に、馬と駱駝）などの大型家畜の場合、野原で寝泊りをし、湖から水を飲み、半野生的な生活をしていることが多い。羊や山羊といった小型家畜（生れたばかりの子家畜や病弱な小型家畜を除く）の場合、昼は草原で牧草を食べ、夜になると畜舎に戻るなど、比較的人間の近くにすることが多い。しかし、この小型の家畜が人間の近くにいないもの、ペットのように主人と同じ部屋で生活したりすることがなく、家畜には畜舎があるなど、人間と家畜の間に一定の距離が保たれている。この意味において、家畜は図2に示すように人間界よりも自然界の方に深く入り込んでいる。このように、自然界に大きく属する家畜を放牧することによってマラチンが大自然に接触している。したがって、コンパニオン・アニマルや学校で飼育されている動物は完全に人間界に属しているとみなすことができる。

3 子どもが家畜と関わる頻度

子ども対象の調査では「あなたは家ではどんな手伝いをしていますか」（自由記述）という質問に対して以下のような回答が得られた。手伝いは、その

内容ごとに「家畜の手伝い」と「家畜以外の手伝い」の2つに分けることができる（項目記号【a】）。

家畜の手伝い

- 【a-1】 羊山羊の放牧 172人
- 【a-2】 家畜に水を与える 50人
- 【a-3】 牛の放牧 40人
- 【a-4】 子家畜の放牧と水を与える 22人
- 【a-5】 馬の世話 17人
- 【a-6】 家畜を畜舎から出したり入れたりすること 13人
- 【a-7】 家畜の飼料用の草刈り 10人
- 【a-8】 家畜の乳搾り 10人
- 【a-9】 羊と山羊の毛刈り 6人
- 【a-10】 家畜の飼料を与える 4人
- 【a-11】 子羊や子山羊にミルクをやる 3人
- 【a-12】 畜舎の掃除 2人
- 【a-13】 家畜の出産の手伝い 2人

家畜以外の手伝い

- 【a-14】 人用に水汲み 12人
- 【a-15】 燃料集め 10人
- 【a-16】 食事の仕度 8人
- 【a-17】 買い物（野菜） 6人
- 【a-18】 窓ガラス拭き 6人
- 【a-19】 木や花の手入れ 4人
- 【a-20】 子守り 3人
- 【a-21】 その他 7人

【a-1】から【a-9】までは家畜と直接関わっている手伝いであり、【a-10】から【a-13】までは家畜と間接的に関わっている手伝いである。両者を合わせると家畜の手伝いが全体の86%を占めている。【a-14】から【a-21】は一般的な家事の手伝いであり、全体の14%しかなく、家畜と関わる手伝いの方が圧倒的に多いことが分かる。

ここで、家畜と関わる手伝いの内容を詳しくみてみよう。【a-1】【a-3】【a-5】の大人の家畜の放牧であるが、冬はマイナスの寒さに耐え、夏は灼熱の太陽を避け、時には狼などの野生動物と遭遇するなど忍耐力と勇気を必要とする仕事である。また、朝から晩まで羊の群れと共に牧草を求めて広大な草原を歩くことは幼い子どもにとって冒険そのものでもあり、判断力や責任を伴う仕事でもある。【a-2】【a-4】の家畜に水を与える仕事であるが、深さ3m

ないし5mの水井戸から水を1バケツずつ汲み、家畜群の喉を潤すことは何時間に及ぶ体力を使う仕事である。【a-7】の草刈の手伝いであるが、近年は機械で牧草を刈るようになったといえ、刈った草を人力で集めたり運んだりしなければならないから大変な労力を要する仕事である。【a-9】の家畜の毛刈の仕事であるが、羊や山羊を1頭ずつ掴み、ハサミで毛を刈ることも同じく体力や集中力を伴う仕事である。【a-6】【a-10】【a-12】は体力を使う上、サボることを許さない仕事である。【a-8】【a-11】【a-13】は喜びを感じたり、感動を覚えたりすることのできる手伝いである。

このように、子どもの手伝いの多くが体力を使う手伝いであり、小学校5年生でも大人に負けないぐらいの仕事をこなしている。マラチンの子どもが、このような手伝いによって肉体的には勿論、精神的にも鍛えられている。

ところで、このような手伝いを子どもが自ら望んで手伝っているのだろうか。それを知るため、子ども対象の調査では「なぜ手伝いをするのか」と聞いたところ次のような回答があった（項目記号【b】）。

- 【b-1】 なにげなく手伝う 179人
- 【b-2】 家事は大きな意味で勉強になるから手伝う 113人
- 【b-3】 家事を手伝うのが子どもの義務だと思うから手伝う 42人
- 【b-4】 小さい時から手伝ってきたから家事を手伝うことが当たり前になった 37人
- 【b-5】 親（祖父母）の体調がよくないから手伝う 21人
- 【b-6】 褒美を貰うから手伝う 3人
- 【b-7】 その他 8人

【b-5】【b-6】のように「親（祖父母）の体調がよくないから手伝う」や「褒美を貰うから手伝う」と答えた者が少数いるものの、【b-1】から【b-4】に見られるように大半の子どもにとっては家事や家畜の世話の手伝いが、当然な行為として行われていることが分かる。このように、子どもが家畜の世話をするときには、男・女・年寄り・若者・子どもにそれぞれの役割分担がある放牧文化が反映している。

4 結果と考察

マラチンが飼育している五畜にはそれぞれの特有の個性がある。マラチンは身近にいる家畜特有の個性を例にして、子どもをしつけることが多い。例えば、牛は遅鈍で大人しい性格の持ち主であるから、動きが鈍く何事にも遅い子どもを牛に例えて「早く動かないと牛になっちゃうよ」としつける。駱駝は群れで移動することなく、孤立して行動を取る上、何事にも無関心な家畜であるから、あまりにも個性的な子どもに対して「駱駝みたいな単独行動を取ったら、いつか迷子になるよ」としつける。羊は殺される瞬間も抵抗することができない大人しい家畜であるから、大人しくて泣き虫の子を羊に例えて「お前は羊じゃなく、人間だからもっとしっかりしなさい」としつける。山羊はずるがしこくて、留守の家などに入っていたずらをし、主人によく叩かれる家畜であるから、腕白で常に動き回る子どもに対して「山羊みたいに動き回っていたら、お父さんに叩かれるよ」としつける。馬は人間になつきやすく、心優しい信頼できる存在であるため、悪い例としてあげるのはめったにない。勿論子どもも家畜特有の個性を熟知しているから親が言いたいことがよく理解できるのである。ここでは、家畜の悪い部分を例にあげて子どもをしつける方法をあげたが、家畜は子どもにとって決して反面教師だけの存在ではないのである。

ここからは、筆者が行った調査データを用いて、家畜が子どもにどのような影響を与えているのかを明らかにする。なお、調査の集計結果を表2、表3、表4に整理した。これらの表には、家畜が保護者に与えている影響についてのデータも添付しているが、本稿では保護者のデータは詳しく分析しないことにする。

第1に、家畜との関わりによって子どもがどのような感動を覚えているのか。その感動が子どもの発達にどのような影響を与えているのか、を考察する。子どもと保護者の双方に「家畜の世話をする中で感動したことがありますか」（自由記述）という質問したところ表2のような回答があった。表2の子どもの回答の内容をみてみよう。

【d-1】は生命の偉大さに感動している。家畜は生きる期間が人間に比べて比較的短い、それだけに、傷口をなめて治すことができるなど強い生命力

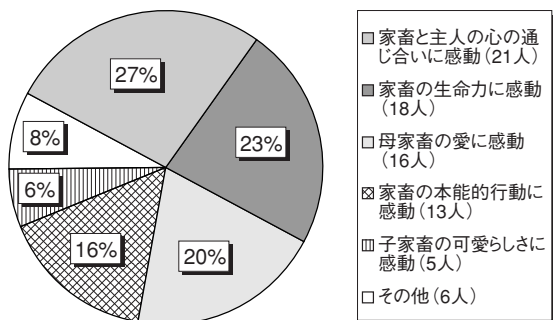


図3 家畜との関わりによる感動の分類図

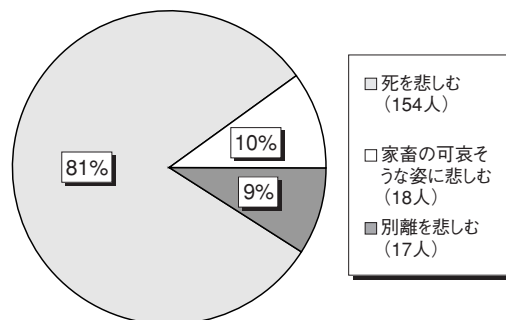


図4 家畜との関わりによる悲しみの分類図

を持っている。【d-2】【d-9】は我が子を守る母家畜の行動に感動している。【d-3】【d-5】は人間と家畜の心の交流に対する感動である。【d-4】は財産である家畜が戻ってきたという感動のように見えるが、その実、主人や故郷のことを忘れずに帰ってきた家畜の本能的な行動に感動している。【d-6】は自分の仕事の成果への感動である。【d-7】【d-8】は子家畜の可愛らしさに感動している。【d-10】は馬に乗って走る時の気持ちよさと活力にあふれた草原やその景色に感動している。

子どもが家畜との関わりによって得た感動をその内容ごとに分類すれば次のようになる。つまり、【d-3】【d-5】のように27%の子どもが家畜と主人の心の通じ合いに感動しており、【d-1】のように23%の子どもが家畜の生命力に感動し、【d-2】【d-9】のように20%の子どもが我が子を守る母家畜の姿に感動している。また、【d-4】のように家畜の本能的な行為に感動している子どもが16%で、【d-7】【d-8】のように子家畜の可愛らしさに感動している子どもが6%、その他（【d-6】【d-10】）が8%占めていることが分かった（図3）。

第2に、家畜との関わりにより子どもはどんな悲しみを感じ、それが、子どもにどのような影響を与えているのかをみてみる。家畜を放牧している家庭の子どもと保護者の双方に「家畜の世話をする中で悲しい出来事が起きたことがありますか」（自由記述）という質問に対して表3のような回答があった。表3の子どもの回答の内容をみてみよう。

【f-1】【f-2】【f-8】は家畜の死を悲しんでいる。【f-1】は家畜の自然死である。【f-2】は人間が家畜を売ったり、屠殺したりする厳然たる事実など、自

然界の営みについて教わっており、極少数であるが、【f-8】のように家畜を残酷に屠殺する漢族をみて、人間の残酷さや文化の相異を感じている子どもがいる。【f-5】はペットの死を悲しんでいるように見えるが、内モンゴルの放牧社会で飼われている犬は家畜の放牧の手伝いや狼などの家畜の天敵から家畜を守るために飼われている。それゆえに、犬は図1のBタイプの家畜の「恩のある家畜」同然に扱われている。【f-3】は家畜との別離を悲しんでいる。【f-4】【f-6】【f-7】【f-9】【f-10】【f-11】は家畜の惨めな姿を見て悲しんでいる。

つまり、【f-1】【f-2】【f-5】【f-8】のように家畜の死を悲しんでいる子どもが8割を占めていて、【f-4】【f-6】【f-7】【f-9】【f-10】【f-11】のように家畜の惨めな姿や【f-3】のように家畜との別離を悲しむ子どもはそれぞれ1割程度いることが分かった（図4）。表2と表3を比較してみれば分かるように、内モンゴル放牧文化においては、「家畜との関わりによる感動」より「家畜との関わりによって生じる悲しみ」の方が圧倒的が多いようである。

第3に、家畜との関わりによって子どもが何を教えられ、何を考えさせられているのかをみてみたい。子どもと保護者の双方に「家畜との関わりの中、あなたは家畜から何を教えられたのですか」（自由記述）という質問したところ表4のような回答があった。表4の子どもの回答の内容をみてみよう。

【h-1】は生と死について教えられたことである。人間に比べて、家畜の寿命は圧倒的に短く、新しい生命の誕生も早い。したがって、家畜の数も多いため放牧文化は生と死に日々直面する文化でもあり、このような営みが人々に生命の尊さや死への悲しみ

6) 内モンゴル社会で起きている「いじめ」と日本社会に起きている「いじめ」の内容が大きく異なる。2008年に筆者が行った調査によれば、今日の内モンゴルの教育現場で起きているいじめには「使い走りやをさせる」「恐喝」「暴力」「物を取り上げる」など体力の差によるいじめが多く、陰湿ないじめがみられなかった。

を実感させている。【h-2】は家畜の悪い癖を見て、自分の悪い癖を気づき、それを直したことである。その中では、子どもが、家畜同士の喧嘩やいじめを見て、喧嘩やいじめが如何に見苦しい行為であるかを知り、自分が喧嘩やいじめ⁶⁾をやめたことに注目する点である。【h-3】は子を守る母家畜の行動から子どもが親心、特に、母親の愛の偉大さ、親への思いやりを感じている。【h-4】は愛の意味の広大さを感じたことである。【h-6】は家畜の本能的な行動が子どもに影響を与えていることが分かる（殆どの家畜が自分の故郷（畜舎）のことを覚えているが、特に馬はこの点において他の家畜より優れている）。このように、家畜が故郷のことを覚えて帰ってくることは家畜の本能的な行動であるが、この本能的行動が子どもの故郷を大切にすることを喚起している。【h-5】【h-7】は家畜のよい面に影響されたことである。【h-8】は家畜の行動によって弱者を守らなければならないという正義感を教わっている【h-9】は羊の大人しい性格を見て、羊のように大人しくなったら、競争化社会に生き残ることができないということを感じたことである。

上述の【h-3】【h-4】【h-5】【h-6】【h-7】【h-8】のように合計65人の子どもが「家畜の良い面から影響を受けた」と答えており、【h-2】【h-9】のように合計103人が「家畜の悪い部分を見て、自分自身の悪い癖を気づき、それを直した」と答えている。つまり、家畜の良い面から受ける影響より、家畜の反面教師たる一面を見て、自分自身の悪い癖を気づき、それを直している子どもが多いことが分かる。このような気づきの背後には家畜の振る舞いを例にとって子どもをしつける放牧文化ならではのしつけ方がある。このように、家畜が子どもにとって「反面教師」となることは現代教育にとって注目すべき一面である。

また、表4の「家畜との関わりによって教えられたこと」の【h-1】では60人の子どもが「家畜の死などによって命について教えられた」と答えているのと同じく、表2の「家畜との関わりによる感動」と表3の「家畜との関わりによって生じる悲しみ」でも「生」、「死」、「愛」に関する回答が大半を示している。モンゴル放牧社会においては、人間が家畜に囲まれて生活している。そして、人間に比べて、家畜の寿命が圧倒的に短く、新しい生命の誕生も早い

ために日々直面する文化でもある。特に、子どもの場合、子家畜の誕生に感動し、子家畜にミルクを与え可愛がり戯れることで心が癒され、家畜の懸命に生きる姿に励まされ、家畜の死（自然死や屠殺などによる死）や家畜との別離に悲しむなど家畜と触れ合うことによって、子どもの生命を尊重する心や喜び、悲しみなど様々な感情が育成されているのである。

おわりに

内モンゴルの放牧社会においては、マラチンと家畜は次のような関係にある。第1に、マラチンは家畜を「経済関係家畜」(Aタイプ)「信頼関係家畜」(Bタイプ)「経済関係と信頼関係のどちらにも属さない家畜」(ABタイプ)（図1）という3つの種別に分けて認識している。それゆえに、マラチンにとって家畜は単なる財産や生計の手段ではなく、家畜は人々の心を癒す存在でもあり、文化や宗教を支える存在でもある。つまり、家畜は可愛らしさ、賢さ、飼いやすさを前提に飼育されていないのである。第2に、家畜が人間より圧倒的に多く、人間が家畜を囲んでいるのではなく、家畜に囲まれるように生活しているので家畜と人間が接触する機会が多い。第3に、内モンゴルの放牧社会では、家畜は人間界よりも自然界に属している（図2）。そのために、マラチンが家畜の世話をすることによって日々大自然に触れているのである。

マラチンと家畜はこのような関係に結ばれているため、マラチンに世話をされ、時には命まで救われた家畜が、逆に人々の心を癒すなど、人々に活力を与えている。特に、子どもにとって家畜との関わりは大きな意味を持っているようである。つまり、第1に、子どもが家畜の世話をしたりする中、肉体が鍛えられるだけではなく、観察力、集中力、判断力、責任感が養われている。第2に、子どもが汚い家畜を見て、自分が衛生面で気をつけるようになったり、家畜同士のいじめや喧嘩を見て、これらの行為を醜い行為だと捉える気持ちが生まれやすくなるなど、家畜との関わりによって子どもの社会性や道徳的感情が自然に育成されている。第3に、子どもが家畜の死（自然死や屠殺などによる死）や懐いた家畜との別離を悲しむことによって生命を尊重する心が養われている。第4に、子どもが家畜の行動によって、親への感謝、故郷への愛情など、自分がよく

分っているつもりで忘れかけているものを日々あらためて感じている。このように、家畜は子どもにとって学びのモデルでもある。

以上が、内モンゴル放牧社会における家畜と子どもに関わりである。家畜と人間が上述したような関係にあるからこそ、「動物虐待」など人間にとっても動物にとってもマイナスとなる働きが抑制されるのである。

参考文献

- 大西奈央、米澤好史、「人間と動物の関係性—動物観の構造とその形成過程を探る—」
『和歌山大学教育学部紀要』59、2009年、17～26頁。
- 金児恵、「コンパニオン・アニマルが飼主の主観的幸福と社会的ネットワークに与える影響」、『心理学研究』第77巻第1号、2006年、1～9頁。
- 金児恵、「動物の存在が人物の印象に及ぼす影響」、『animal Nursing』8(1)、2003年、15～23頁。
- 曾我亨、「牧畜民は家畜を看護するか」、『animal Nursing』8(1)、2003年、7～14頁。
- 映画：『駱駝の涙』監督脚本：ビャンバスレン・ダバー、ルイジ・ファロルニ。

表2 家畜との関わりによる感動

回答者	項目番号	内 容	実数（人）	
			子ども	保護者
子 ど も	【d-1】	障害を克服しようとしている家畜や瀕死の家畜が元気になったとき	18	1
	【d-2】	優しい顔をしながら子家畜に乳を飲ませている母家畜の様子と子どもを愛撫し、見守り、子どもから離れようとしない母家畜の様子をみるとき	15	8
	【d-3】	子家畜を嫌がる母家畜が歌を聞いて、子家畜を嫌がらなくなったとき ⁷⁾	14	4
	【d-4】	売った家畜や草原で迷った家畜が帰ってきたとき	13	2
	【d-5】	人に懐いた家畜がその人に甘え、その人から離れようとしない様子をみたとき	7	2
	【d-6】	母親のいない子家畜の親代わりになって育てたときと、自分が面倒を見て育てた家畜が出産したとき	5	6
	【d-7】	子家畜の元気に遊ぶ姿をみたとき	3	1
	【d-8】	子家畜のミルクを飲む時の可愛い仕草をみたとき	2	
	【d-9】	自分が弱っているのに、子どもに乳を飲ませている母家畜をみたとき	1	
	【d-10】	馬に乗って草原を走るときと、草原で草を食べる家畜群（ある意味景色である―筆者）をみたとき	1	
保 護 者	【e-1】	新しい生命が誕生するとき		8
	【e-2】	馬に乗って草原を走るとき、馬が大会で優秀したとき、草原で草を食べる元気な家畜群（ある意味景色である―筆者）をみたとき		7
	【e-3】	母親がいない子家畜に乳を飲ませている家畜をみたとき		3
	【e-4】	家畜を病気や災害から守ったとき		2
	【e-5】	母家畜が子どもを守り、野生動物と闘う姿をみたとき		2
	【e-6】	夜中、草原で迷ったとき、馬がちゃんと家を見つけてくれたとき		2
	【e-7】	牛が仲間の死体や血の跡に集まり、鳴き騒ぐ様子をみたとき ⁸⁾		2

備考（子どものデータについて）：家畜の世話をしたことがあると回答した235人の子ども中の3割に当たる78人の子どもがこの質問に回答してくれた。その中、2人の回答の内容が不明だったので外して集計した。また、複数回答者が3名で、それぞれ2回答ずつ回答している。

- 7) 家畜が難産の苦しみから子どもに乳を与えることを拒否することがある。この場合、マラチンは母家畜に音楽を聞かせることによって、親子の絆を取り戻す伝統方法を使ってきた。詳しく言えば、母家畜を畜舎などに孤立させ、母家畜の横で長時間歌を歌ったり、楽器を弾いたりする。主に女性が歌を歌い、男性が楽器を弾く。曲は優しく悲しいメロディーが多く「どうして可愛い子どものことが嫌がるのか、早く乳を与えないと可愛い子が死んでしまうよ」という内容の歌詞を繰り返して歌う。最初は母家畜が音楽に驚いて動き回るが、曲を聞いているうちに落ち着いてくる。そして、乳が張ってくる（優しい曲を聞いたからと思われる）につれ、落ち着きがなくなり、我が子を探し、鳴きはじまるのである。しばらく音楽を続けると、母家畜が目には涙を湛えて、時には大粒の涙を流す。その時、親子を対面させると、子どもを嫌がっていたことが嘘だったように我が子をなめながら乳を飲ませるのである。子どもを嫌がることは、駱駝、羊、山羊、にはよく起きるが、このような方法で親子の絆も取り戻すことができる。牛と馬が子どもを嫌がることはめったにない。
- 8) 牛が仲間の血の臭いを臭うとそこに集まり、まるで仲間の死を嘆くように鳴き騒ぐ習性がある。牛は反応が鈍い、頑固な家畜である反面、仲間意識が強い家畜である。例えば、草原に狼などと遭遇すると、大人の牛が子牛を囲むように和をつくり、鋭い角を外に向けて狼を威嚇する。そして、種牛などの群れのリーダーとなる牛が和の外で足や角で砂をまきあげ、狼を威嚇し、角で狼を突いたりして追い出すのである。

表3 家畜との関わりによって生じる悲しみ

回答者	項目番号	内 容	実数（人）	
			子ども	保護者
子 ど も	【f-1】	家畜が死んだとき	90	34
	【f-2】	家畜を売ったり屠殺したりしたとき	59	10
	【f-3】	家畜を人にあげたり、家畜が盗まれたり、迷っていなくなったりしたとき	17	1
	【f-4】	家畜が病気にかかったときと家畜の怪我や障害をみたとき	10	5
	【f-5】	犬が死んだとき	4	
	【f-6】	死や売り払いなどによって、母子や仲間が離れ離れになる際、互いのことを探し回る寂しい様子をみたとき	3	8
	【f-7】	母親に嫌がれた子家畜をみたとき	2	1
	【f-8】	漢族に残酷に屠殺されている家畜をみたとき ⁹⁾	1	1
	【f-9】	子羊が死んだ母の乳をしゃぶっているのをみたとき	1	
	【f-10】	いじめられている子家畜をみたとき	1	1
	【f-11】	父親が家畜を叩いたとき	1	
保 護 者	【g-1】	飢えた家畜が何でも口ににする様子をみたとき		3
	【g-2】	家畜（馬）の数が減り、草原が寂しくなった（家畜は草原を飾っているし、草原に活気をつけているから一筆者）様子をみるとき		3
	【g-3】	家畜が人間に懐き、別れを惜しむ様子をみたとき		2
	【g-4】	近年、中国人が子羊の肉を好むようになったので、家畜が幼いうちに命を絶たれているのを見ると泣けます。狼も狩りの際、年寄りか、病弱な獲物を選ぶというのに ¹⁰⁾		1
	【g-5】	沙漠化を防ぐためと言い、家畜に新芽を食べさせないため、新芽が生える時期に畜舎に閉じ込められた家畜を見る度、悲しくなる ¹¹⁾		1

備考（子どものデータについて）：家畜の世話をしたことがあると回答した235人の子ども中の174人の子どもがこの質問に回答してくれたが、1人の回答の内容が不明だったので外して集計した。また、複数回答者が16名で、それぞれ2回答ずつ回答している。

- 9) チンギス汗が、モンゴル帝国を築いた後、「ヤサ法（憲法に当たる）」の中で「大地に穴を掘ったりしてはいけない。屠畜の際、大地に血をつけてはいけない。家畜を残酷に殺してはいけない」といった大自然の規律を守る規程を作ったのである。そのため、モンゴル人は家畜を屠殺する際、家畜を何秒で死なせ、しかも一滴の血を流さない特殊な屠殺方法を使う。漢族の場合、家畜の首を切って屠殺するので、家畜の血が全部流れ終わるまで家畜が苦しむのである。
- 10) 内モンゴルの放牧社会においては、家畜を処分する際、老いた家畜から処分する習慣があった。しかし、近年、老いた家畜の肉が硬いという理由で子家畜しか売れなくなったため、子家畜が屠殺所に送られるようになった。この人は、子家畜の命の短さを悲しんでいる。
- 11) 2001年から、草原の砂漠化を招いたのは家畜の過増加であるという説のもとで「禁牧」政策が実施された。その「禁牧」政策の一環として、春には家畜を畜舎に閉じ込み、完全に飼料で飼育させられている（新芽を食べてしまうと草が生えなくなるから）。

表4 家畜との関わりによって教えられたこと

回答者	項目番号	内 容	実数（人）	
			子ども	保護者
子 ど も	【h-1】	家畜の死や生を体験する中、命ついているいろ教えられた	60	
	【h-2】	家畜の悪い癖を見て、自分の悪い癖を直した 【内訳は以下の通りである】 ■家畜同士のいじめを見て、自分が人をいじめるのをやめた上、いじめをみたら止めるようになった 20人 ■汚い家畜を見て、自分も衛生面で気をつけるようになった 13人 ■家畜同士の喧嘩を見て、みんなと喧嘩をするのをやめた 13人 ■その他 56人	102	18
	【h-3】	子どもを守る母家畜を見て母親の愛の偉大さを知った	26	10
	【h-4】	人間だけが愛を持っているのではなく、すべての生き物が愛を持っていることを知り、生き物をもっと大事にすべきだと知った	20	18
	【h-5】	家畜の優しいところを見て、自分も優しくなった	13	30
	【h-6】	家畜が故郷のことを忘れないことから、自分も人間として故郷のことを忘れてはいけないとあらためて感じた	2	4
	【h-7】	馬の走りを真似て走っているうちに早く走れるようになった	2	
	【h-8】	弱者を守るべき（親も子どもを守るべき）だと知った	2	2
	【h-9】	屠殺される時も抵抗しない羊を見て、羊のように大人しくなったら今日の社会に生き残れないと思った	1	5
保 護 者	【i-1】	生態系のバランスについて知った		6
	【i-2】	家畜が人に懐く様子と、最初は人を怖がる家畜が人と接触しているうち、人に懐いてくる様子を見て人間も同様ではないか、と知った		4
	【i-3】	飢えた山羊が木をかじる様子を見て、人間も困ったからこそ違法なことをしているのではないだろうか。だから、困っている人を助けることによって、社会が改善されるのではあいか、と思った		3
	【i-4】	家族愛を知った		2
	【i-5】	子どもを積極的に家畜と接触させ、生き物を大事にする心を育てるべきだと知った		1
	【i-6】	家畜がモンゴル人に生き物を大事にする一面をもたらしたと知った		1

備考（子どものデータについて）：子ども用の調査の全回答者の411人の子どもの中、253人の子どもから回答が得られた。その中、25人の回答の内容が不明だったので外して集計したので、回答者数が228人となる。複数回答がない。